

『シェアから考える「より良い暮らし」』

衣食住という言葉にあるように、私たちの生活の中で「住む」ということはとても大切なことのひとつである。人それぞれにその人なりの住まい方があり、その中で住宅のあり方も多種多様である。戸建てや集合住宅、その中でさらに分譲・賃貸・シェアハウスなど様々で、種類も時代によって変わっていく。

私は現在、大学で建築学を学んでいるのだが、専攻を選ぶ際、建築学と土木環境工学とでとても悩んだ。どちらも人々の生活を考えていくうえで欠かせない学問である。アプローチの仕方は異なるものの「より良い暮らし」のためにという点では双方の目的は同じであると思った。考えた末、私は人間単位のミクロな視点で都市・住まいを見つめ直したいと思い、建築学科を選んだ。しかし、自分たちの暮らす都市・住まいを、より良いものにそして安全に安心して暮らしていけるように、その手伝いができるようになりたいという思いは変わっていない。そのためには、ただ建築学だけを学ぶのでは足りないと思うし、自分の足で海外含め様々な都市を訪れ、自分の目で都市ごとに特徴溢れた住まい方を見ていきたいと思っている。どういう都市にそしてどういう住宅に住みたいか、ということは、人によって大きく異なるだろう。だからこそそれを共有することは、「より良い暮らし」を考えるうえで意味があり、お互いの視野を広げられる素敵な機会になると思う。

しかし、ただ個々が好きに考えただけでは現実性がない。「より良い暮らし」を考えて行くうえで、もちろん全てが理想通りというわけにはいかない。問題が発生した時、それに対してどう対応していくかが大切だ。例えば、現在日本は少子高齢化という問題に直面し、考えていかなければならない。高齢者の人口が増え、支えて行く若い人口は少なくなっていく。その中で、今改めて共生ということの意義が問われるのではないかと思う。ただひとりひとりが自分のためだけに暮らすのではなく、相互に関わり合い助け合いながら暮らしていくことが必要になっていくと思う。

私は今マンションに住んでいる。マンションは戸建てに比べると住戸同士の距離が近い。また住民は共有となる通路を通るため、近隣の方とは自然と顔をあわせる機会も多い。同じ棟に住んでいる方の子供が気づいたら小学生になっていたり、上に住んでいる方がいつのまにか犬を飼っていたり、マンションの敷地に猫がすみついてしまったり、こういった小さな生活の気づきや色々な出来事の共有が楽しい。集合住宅は、挨拶やちょっとした立ち話など交流が生まれるきっかけが多い住宅の形であると思う。また、私の住むマンションは、棟同士が囲むように公園があり、放課後は近所の小学校に通う子供たちで賑わっている。親で

なくても皆で子供たちを見守ることができることも良い点だと感じる。

ところが、最近はマンションが建ってからだいぶ年月が経ったということもあり、住民の高齢化が進んできたように感じる。バリアフリーがあまり進んでおらず、不便な点も多く目立つ。しかし、バリアフリーのための対応を全て施すというのは現実的ではない。だからこそ建物の構造物としてのハードな面だけでなく、その暮らしの仕組みや生活のリズム・関係性といったソフトな面を考えていくべきだ。私の住んでいるマンションのように建物自体のバリアフリーが十分でないのであれば、今までのように、子供の成長・安全を見守るだけでは今後の「より良い暮らし」を守っていくことにはならない。高齢者にも手を差し伸べ、皆で声を掛け合い、見守っていく必要があると思う。しかしもちろん、各々住戸は別であり暮らし・生活も異なるわけで、なかなかその共有や共生は難しいことも事実である。

こういった問題は、私が住んでいるマンションだけの話ではないだろう。どこの地域でも、集合住宅でなくてもこれから考えていくべき問題となっていくに違いない。その中で、「より良い暮らし」のために共有・共生ということの意味を改めて考え、重視していくべきだと思う。

ここまでは漠然と、「より良い暮らし」と都市と住宅について考えを述べてきたが、ここからはもう少し具体的な話をしていこうと思う。神奈川県横浜市という一つの都市についてみていきたい。

私は横浜市に住んで20年以上になるが、横浜市は本当に色々な面を持った都市であると感じる。海沿いの夜景が美しいみなとみらい、小籠包が美味しい路面店などの並ぶ元町・中華街、異国情緒な雰囲気がある山手、多くの電車の乗り換え拠点となる横浜駅、国際港ともなる横浜港などは、多くの人が「横浜」と聞いた時に思い浮かべるもしくは知っている一面であろう。しかし、そういった地区から少し移動しただけで、畑や田・森林であふれている地域、狭い飲屋が密接して立ち並ぶ地域、簡易宿泊所の立ち並ぶ「ドヤ街」と呼ばれる地域があることを知っている人は少ないだろう。私は、横浜市の魅力の一つは、様々な地域があるからこそ、一言では表せないような深さがあることではないかと思う。しかし、それを魅力という前に、やはり考えてはいかないといけない問題は多くある。

その中の一つが、ドヤ街地区の問題であろう。横浜市の寿地区は日本三大寄せ場の一つとも言われ、寿町・松影町・扇町・長者町・三吉町にまたがった地区である。私が寿地区を初めて訪れたのは高校生の時であった。通っていた中高が寿町と同じ最寄駅である石川町駅

付近にあり、中華街方面と方向を間違えて足を踏み入れたことがある。すぐに道を間違えたことに気づく程、この地域は空気感も路上の様子も異なっていた。路上にはゴミがそのまま捨てられていたり、地面に座り込んで話している高齢の方がいたり。当時の私はまだ寿地区のことを全く知らず、そのまま逃げるように立ち去ってしまった。通っていた中高には奉仕活動を行っている部活があり、その部活では毎年冬に寿地区で越冬支援を行っていることを後で知った。そこで初めて、寿地区がどのような場所なのかということを知る機会となった。

戦後の横浜港では、米国からの支給品の荷下ろし作業をする港湾労働者の人手が多く必要となった。その時、ちょうど米軍から引き渡された寿町に宿泊所が建て始められ、その後の高度経済成長期と合わせてその需要は高まっていった。様々な建築物も建設ラッシュとなり、寿地区は日雇い労働者たちの拠点として賑わうようになった。しかし機械が導入されるようになり、石油ショックなども起こると、求人が減り若い労働者が集まらなくなった。しかし、残った労働者の高齢化はすすんでいき、住民の50%が高齢者かつ80%が生活保護受給者である現在に至る。

元からある簡易宿泊所では、当然のごとくバリアフリーは考慮されておらず、また、あくまで「住宅」ではないため通風や採光など、最低限の基準を満たすものも少ない。一間も三畳ほどである。そもそも簡易宿泊所自体、一時的な住まいとしての扱いなのだが、横浜市では、その住所が住民登録に使えてしまう。そのため、生活保護を受けることができ、年金ももらうことができる。保証人なしに住むことができ、また、似たような境遇の人々が集まっているということもあって、身寄りのない高齢者の方も新しく寿地区に移住してくることもあるそうだ。その結果、寿地区には定住している人が大半で、市側が一つの地区にそうした人々が集まるような誘導をしているようにすら、私は少し感じてしまう。多くの人知らないであろう、こういった横浜市の裏に隠れている一面は、このままで良いのだろうか。

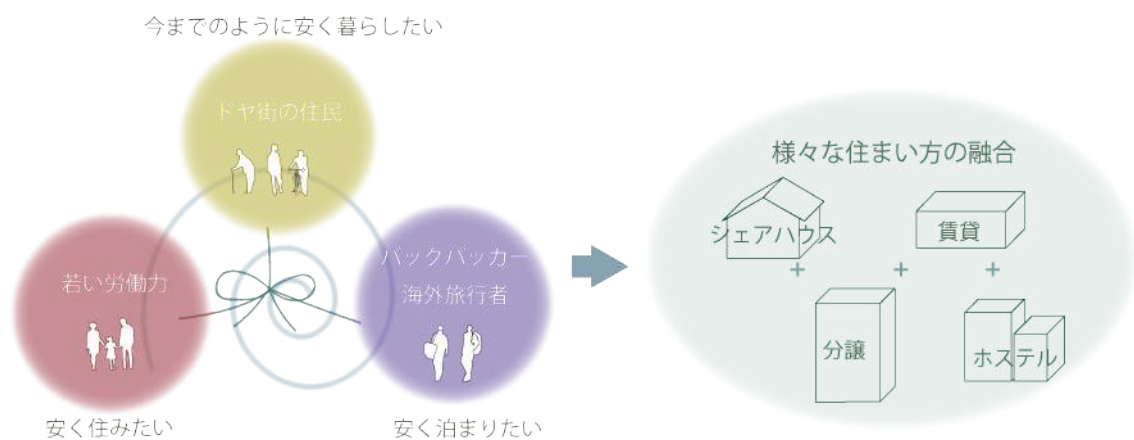
今年春、久しぶりに寿町を訪れ、改めてそのまちを歩いてみた。やはり寿地区に近づくとまちの空気感が変わっていき緊張感が増した。前訪れた時は思わず目を背けてしまったまちであったが、今となって見渡してみると以前はなかった気づきが多くあった。座り込んで話している人、自転車の溢れ出し、車椅子でまちを移動する人、歩道にはみだした店。全ての人々がただ孤独に暮らしているのではなく、そのまちの中にどこか拠り所を求め、住民同士にも何とも表し難い絶妙な距離感が保たれている気がした。お互いの人生に干渉はしないが、生活は許容し合い、同じ場所で生きていく。ある意味どんな場所に住むより最も人間ら

しく暮らしているのではないかとすら思った。「より良い暮らし」を考えていくうえでも、今保たれていることは大切に考えていかなければならないと感じた。



(溢れ出しが目立つ寿町の様子)

私は寿地区を観光地区に変える必要は全くないと思う。ただ、今住んでいる高齢者の方が「より良い暮らし」ができる環境は作るべきだと思う。また、住み良くするためには、高齢者に優しいまちというだけでは、この先限界がきてしまう。そこで、この地区に新たな若い労働力や近年増えている、簡易宿泊所への海外バックパッカーたちを呼びこむことで、地区の活性化・多世代化も図りたい。また、同じ建物の中でも様々な住宅のあり方・住まい方を展開させ、先ほども述べていた共有・共生ということのあり方を提案したい。

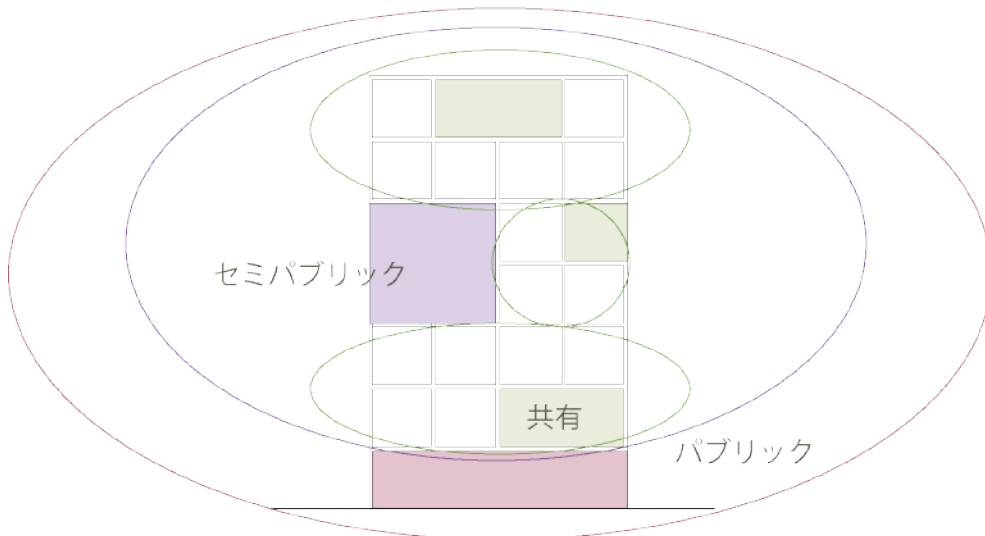


(イメージ図)

寿地区の現住民・若い世代・バックパッカーたちに共通しているのは安く住みたい、泊ま

りたいということである。しかし現状として、簡易宿泊所の一泊約 3000 円という値段は月単位で考えると安いわけでもない。簡易宿泊所の運営会社は、そのことに味をしめ、最近またその新規建設を行うなど、あまり良くない商売の形ともなってしまうと感じる。ここで私は住まいの形として一種のシェアハウスを提案したい。皆が同じ空気感を共有し、公道にまで生活感の滲み出している寿地区という環境だからこそ、考えられる提案だと思っている。もちろん今後は他の地域でもこういったことを考えていきたい。しかしまだ現状として、シェアすることすなわち誰かと何かを共有することによって抵抗のある人もまだ多い。SNS の利用が増え、情報や近況の共有が進む今、さらにこれからシェアの概念が広がっていくのではないかとも思う。そういった時、一つの選択肢として、住まいの共有も考えられて行くと思う。

しかし、どんな地域であっても、もちろん寿地区であっても、人によって他人とどこまで共有できるかということは違って来るだろう。だからこそ、シェアの度合いを選べるシェアハウスを考えていきたい。具体的には、個々が寝たり荷物を置いたりプライバシーが保たれる専有部、キッチンやシャワースペースなど生活に必要な機能を持つ共有部、リビングや娯楽室など住民の情報共有にも用いられるセミパブリック部、保育園や図書室・食堂などの機能を持ち、住民だけでなく近隣住民も利用可能なパブリック部の 4 種の空間を提案する。水回りの機能や生活空間の一部を皆で共有することで、住まいとしてのコストは下がり、また、専有部の数を増やすことにもつながる。住民たちは、それぞれの用途に応じて、使用する場所すなわち共有の範囲を選ぶことができる。空間をシェアすることをただ「狭い」や「自由がきかない」といったマイナスの意味に捉えるのではなく、「自由に使える空間が多い」や「情報共有がしやすい」などといったプラスの意味として捉えていきたい。



(断面イメージ)



(パブリック部の機能の一例)

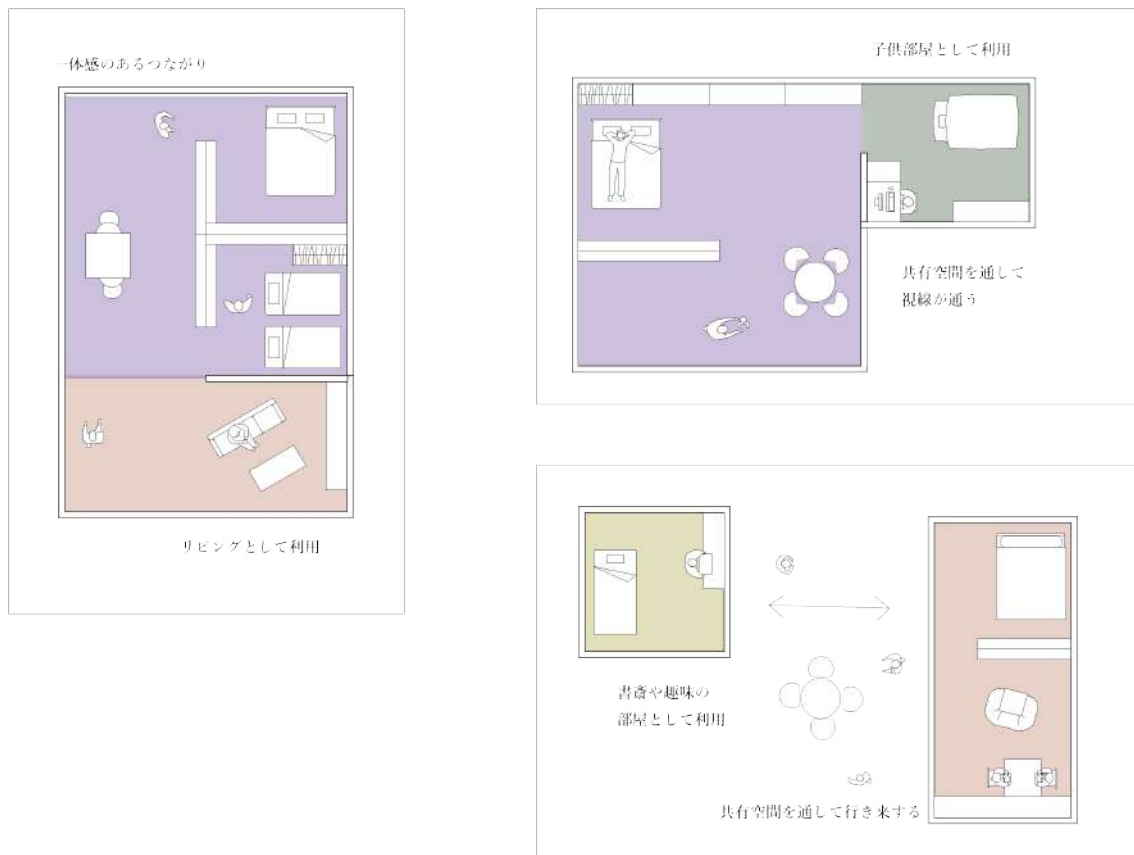
住居の形式としても、賃貸・ホテル・分譲・ゲストハウスなど、それぞれのニーズに応じて住まいを選ぶ。そして、大きさもユニットとして何種類か用意し、単身者向け・夫婦向け・家族向けなど選択可能とする。



(間取りの例)

また、家族構成の変化や個々の状況に応じて、借りる部屋を増減できる。それによって、さらに様々な暮らし方が可能となる。個々の住居がただ独立するのではなく、共有空間を間に介することで暮らしの新たな可能性が開かれる。シェアハウスという制限のある中でも、それぞれの考える「より良い暮らし」に近づけていくことはできると思う。こういうシェアハウスでも、まずは住民同士の挨拶から始まるだろう。そして、何度も顔を合わせていくうちに立ち話が生まれるかもしれない。既存のマンションではそれが行われるのは外廊下だが、ここには共有リビングがある。少しずつお互いの考えの共有が起こるならば、それもまたシェアである。ただ空間や暮らしを共有するだけではない。自分とは違った人生観や考え

に触れ、それを共有することもあるだろう。その連続が「より良い暮らし」にもつながっていくのではないだろうかと思う。



(借りる部屋の組み合わせの例)

シェアハウスには様々な形と可能性があると思う。1つの例として、今回考えたようなシェアハウスについて述べてきたが、大切なことは、シェアの形・共有の仕方を、時代と住民の年齢層に対応させつつ一つの建物の中で融合させるということだ。それが可能となれば、みんな違ってみんないい、お互いがお互いの人生を許容しあえるような、深みのあるまちを作っていく第一歩となるのではないだろうか。住民たちが試行錯誤しつつ、時間をかけながら、共有の形を馴染ませていくことに大きな意味があると思う。

では、こういった住まいが都市にどういった影響を与えていくのか。寿地区の場合は先にも述べたように横浜市の裏に隠れている部分となってしまっている。だからこそ、まずは寿地区のポジティブな部分に気づいてもらい、こんな暮らし方もあるのかと負のイメージを少しでも払拭してもらいたい。それを広めたり、見世物にしたりする必要はなく、都市の一部として、みんなそれぞれがそれぞれの思う「より良い暮らし」を目指そうとしていること

を感じてほしい。何かを共有するということは、お互い歩み寄り助け合い見守り合うことにつながっていく。皆がそれに気づいた時、改めてシェアということの意味が問われ、こういった新たな住まいの形も考えていかれるのだと思う。